

六. 古参の出番

二週間ほどの予定だった圭介の現地出張は長引いていた。客先のもたらす苦情は現地工事の一般常識を超えて厳しいものになってきていたため、滞在期間を少し延ばすよう河島から指示があったのだ。工事現場の空気に居心地の良さを感じてきている圭介にとっては、心情的に願ってもないことであった。自分の予測や判断が現地工事を進めるのに役立っているという実感が圭介に喜びを与えるようになっていたのだ。河島は電話を切り際に一言付け加えた。

「・・・・・・近いうちに安田さんが行くからな。もう川村君一人では支えきれなくなったとみて、ぼくから頼んどいた」

配管工事も仮付けから本付けに移る頃になると、高木自身が現場を見回ることが多くなった。秋山と違って高木は、何かを現場で発見してもその場で言い出すことがなかった。大きな目を落ち着きなくキョロキョロさせて歩き回る高木を、工事屋たちは嫌っていた。

「また、難癖つけるネタでも探しとるんやで。文句を言うなら、わしらに言うてくれたらええのに・・・・・・」

高木の姿を認めると高瀬はそう愚痴を言った。高木の苦情は全て、直接あるいは秋山の口を通して河島のところへ電話で持ち込まれていたのだった。

高木の姿を多く見かけるようになると、秋山が現場に姿を見せることが少なくなった。現場に現れた時でも、秋山は高瀬や圭介に二、三の質問をするだけで、以前のように苦情を口にするには無くなっていた。

「最近、秋山さんは元気がないようですね」

オイルセラーから引き上げられて本溶接されていく鋼管を並んで眺めながら、圭介は高木に尋ねた。

「ええ、ちょっと胃が悪いらしくてね・・・・・・」

「ほう、それで近頃はあまり現場に来られないんですね。顔色も良くないようだし・・・・・・」

「まあそれでも、食事療法で行けるらしいですけどね」

秋山が昼休みにグラウンドの脇の草むらの中を抜けて、社宅に帰って行くのを圭介は二、三度見かけたことがある。運動会の日に皆がビールを飲んでいる中で一人ジュースを飲みながら、大したことはないと言っていた秋山のことが思い出された。自宅のダイニングキッチンで一人で粥を食べる秋山の姿を圭介は想い浮かべた。

「秋山さんは前から胃が弱かったんですか」

「いやあ、そんなことはないですよ。細かいことに気を遣い過ぎるせいじゃないのかな。もう少し大らかにやれば良いと思っているんですがね」

高木の語調は冷たく、そこに非難めいたものが含まれているのを圭介は感じ取った。高木の口元にはいつもの皮肉な笑いはなく、目は落ち着きなく動き回り、表情には不安の影が見て取れた。

武藤陽子が裏通りの入り口から入って来るのを高木が認めた。

「進藤さんか」

そう訊いた高木の口元に皮肉な笑いが戻っていた。

「いいえ」と陽子は首を振った。

「高木課長にお電話です。河島さんという方から」

河島の名を聞くと高木は急いで事務所へ戻って行った。

その後ろから陽子が事務的な会釈を残してゆっくりと出て行った。配管工たちが本付け作業を行うアーク溶接のパチパチとはじける音が絶え間なく聞こえていた。

午後の仕事を始めて間もなく、安田がやって来た。川村の知らせでハウスに戻った圭介に、安田は柔和な口元を三日月形にして笑いかけた。機嫌の良い証拠だった。

「また一緒にやることになったな、進藤さん」

「河島さんから聞いていると思うけど、細かいことにうるさくてダメなんや、ここは。安田さんみたいなベテランに『これでいいんです』と一言いってもらわんと、あの人は信用せんよ。何も知らんから不安なんやろうね」

「河島さんが言うのとったけど、秋山とかいうガキがえらい細かいらしいな。今度の話もひどい話やで。あんな細かいこといちいち気にしとったら工事なんかできんでな。腐った女みたいにウジウジした野郎と違うか」

河島はどうやら秋山の口を通して色々と苦情を聞いているらしいと圭介は察した。今まで高瀬や川村、そして圭介の三人のうちの誰かに直接苦情を伝えていた秋山を頭に置いてみると、圭介には解せぬことであった。昼前の高木とのやりとりが思い出された。最近の苦情の源は高木ではないか、ふと圭介は思った。

「秋山さんは最近あまり文句を言わんですよ。胃潰瘍が悪くなっているらしいし・・・・」

「ほう、そうかね。しかし、あんな細かいことを気にするようじゃ胃潰瘍にもなるやろうな」

安田は「あんな細かいこと」ともう一度繰り返した。安田が話し始めた苦情の内容は現場に詰めている者たちにとっては初耳であった。

現場で寸法通りに仮付けされた配管類は、現場から外して作業ヤードに持ち込んで本付けされる。本付けの溶接は、鋼管と継手の間は突き合わせて外側からやる。鋼管とフランジの間は挿し込んで内側からやる。溶接の際に、アークの勢いで溶けた鋼が細かく飛んで溶接部の周辺に不安定にこびり付く。これをスパッターと呼ぶ。

また、溶接部にはノロと呼ばれる非金属の被覆物が付着する。鋼管の内側にノロや

スパッターがこびり付いていると、管内を流れる油の汚れの原因になるので、内側溶接部分には溶接後にグラインダーをかけるのが普通だ。ここまでの処理をした上で配管類は酸洗に出され、最終的にフラッシングで完全に清浄な内部に仕上げられる。これが一般的な工程である。

安田の話は圭介たちを驚かせた。客先は突き合わせ部の外部溶接部分からも内部にノロが侵入するからそれを除去するよう要求していた。突き合わせ部にも全く隙間が無いわけではない。確かにノロが侵入する機会はあるだろうが、確率的には極めて小さく、仮に侵入があったとしても、酸洗とフラッシングの段階で完全に除去されてしまうのだ。

配管の奥の方のそういう部分のノロの除去の方法を圭介は知らなかった。「まあ、方法が無いわけやないがな」と安田は言った。煙突掃除屋のブラシのようなワイヤブラシを鋼管に通し、その可撓軸をモーターで駆動してやる方法だった。その際にはノロの落ちを良くするために、ワイヤブラシを通す前に溶接部分を外からハンマーで叩いてやる必要があった。

翌日からその作業をやるために道具を手配してきた、と安田は言った。「ハンマリングなんてフラッシングの時にどうせやることやないか。二度手間やで」圭介は不服そうに呟いた。「小うるさいガキの子守やと思ってやらにゃ仕方ないやろう」安田は諦めの表情を隠さずに寂しそうな笑いを浮かべたが、すぐに真顔になった。「川村君、配管屋の親方に言っといてくれや。明日からブラッシングとハンマリングの人数分だけ増員してくれってな」

川村がゆっくりと立ち上がり、ハウスを出て行った。安田の手際の良い段取りを聞かされたばかりの圭介たちの目には、川村の後ろ姿はいかにも、もっさりとして感じられるのだった。こういう応答の速さが、安田が何処の客にも受けが良い理由なのだろうと圭介は思った。

この日の午後は圭介が安田を案内して現場をまわった。まわりながら圭介は工事の要所ごとに細かく説明した。ごく普通に説明するつもりでいるのだが、客先から苦情を言われた所はどうしても話が大げさになりがちだ。その度に安田は口元を三日月形にして笑った。減速機の基礎のヘドロすくいの話をした時には、安田は声を上げて笑い出してしまった。

「進藤さん、・・・・あんたもとうとう工事屋になってしもうたなあ。そりゃあ、北山の親方に気に入られるわけや。あの親方に気に入られるようならもう工事屋としてやって行けるでえ。設計屋なのに、あんたも変わった人やなあ」

「・・・・」

返す言葉もなく黙っている圭介の顔を覗き込み、安田はからかうような笑い方をした。笑い声とは裏腹に、自分を見つめる安田の目が暖かいのに圭介は気づいていた。胸の内にじんわりと広がっていくものに圭介は心の安らぎを覚えているのだった。

高木は午後には現場に姿を見せなかった。昼前の河島からの電話は恐らく、安田が今日から現地に駐在することの連絡に違いなかった。安田が事務所まで挨拶に出向くのを待って、敢えて現場に姿を現そうとしない高木の態度を想像して、圭介は腹が立つ思いだった。

一通り現場を歩き回って外へ出ると、日が沈むところだった。圭介が来た頃に比べると随分日暮れが早くなっている。琥珀色からオレンジ色に変わろうとしている空を背景に雑木林の梢がゆれている。この二週間ほどの日暮れ時の変わりようが秋の深まりを人々に感じさせている。外の空気の冷たさに圭介は思わず肩をすくめた。

「うっ、寒う」と安田は小さく叫んだ。「寒いところだな、ここは」。

ハウスで一服している時、圭介は気になっている高木のことを安田に話した。煙草をアルミの灰皿にこすりつけながら安田は面白そうに笑った。

「ここは妙なやつが多いんやなあ。世間から隔離されているみたいなこんな所にいると頭もおかしくなるんやないか」

「そうかもしれんなあ。だけど安さんもここはええ所やと思うやろ」

「確かにそうやね。だけどやっぱり人間はある程度人混みの中で揉まれんとおかしくなると思うで。今日初めてここへ来ておれはそう思ったね。秋山とか高木とかいう妙な人間は、こんなちっぽけな共同体みたいな所で生活しているからでき上がってまうんやろなあ」

「なるほどねえ・・・・」

安田の言うことに圭介は道理を感じた。人間が互いにぶつかり合うような工事現場を渡り歩いてきた安田の体験が、言葉の内に強く脈打っている。工事屋たちの体験が生み出す実践的な人間観はいつも圭介の心に新鮮な衝撃を与える。

感心して首を上下に動かしている圭介を見て安田は真面目な顔をして言った。

「でも安心しなよ。ここへ来る時に事務所に寄って工場長に挨拶してきたから」

「高木さんには・・・・」

「いや、してない。高木さんも秋山さんも事務所には居らんかったからね」

「それじゃ帰りがけにまた事務所に寄ろうや。あの人たちにつむじ曲げられたら、おれたちが困るもんな」

安田は頷いた。いよいよ外は暗くなってきている。間もなく高瀬が戻って来た。高瀬がセブンスターを一本吸い終わる頃、配管屋たちと川村がぞろぞろとハウスに戻って来た。裸電球ひとつの薄暗いハウスの中は急に賑やかになった。作業服から

通勤着に着替えながらの談笑の中には一日の労働を終えた者たちのくつろぎと満足感が溢れている。工事現場での最も楽しいひと時だと圭介は思った。

そんな雰囲気の中でも、安田は翌日の作業の段取りを川村に指示することを忘れなかった。川村は安田には一目も二目も置いているらしく、常に従順だ。二人の関係は師弟関係を表しているように圭介には感じられた。河島と自分との関係と比べてみて圭介は羨ましいような気持ちになるのだった。

河島と圭介は純粹にクールな上司と部下の関係にある。それは指示する者と指示を受けて業務を行う者との厳しい関係である。現代の管理システムで言う最も合理的で効率的な関係なのだ。

もっとも、圭介は河島と暖かい関係になりたいとは思っていない。河島は確かに圭介を感服させるだけの実力と優れた業務感覚を持っている。その点では圭介は河島を尊敬している。だが、圭介はそれ以上河島に近づくことができない。尊敬はできても心酔できないとはこういう状態を言うのだろうと圭介は考えている。

仕事を離れた時に表面に出てくる河島の人間性が圭介に親しみを覚えさせないのだ。いや、むしろ河島の心は仕事をしていない時でも仕事を離れることはないと言ったほうが的確かもしれない。河島こそまさに現代の企業社会に見事に適応し切った最も現代的人間に違いないと圭介は感じている。

安田は会社のライトバンを関西から運転して来ていた。川村と圭介と高瀬がライトバンに乗り込んだ。事務所の前で車を止め、四人は車を降りて事務所へ入っていった。安田を高木と秋山に紹介するためだ。

事務所を出て帰途につく時、高瀬が四人の胸章を集めながら言った。

「わし、タクシーを呼んで帰るからここで失礼するわ」

「なんや、皆同じ宿やないんか」

安田が驚いて言った。川村が黙って安田に頷いた。安田のあきれ顔を圭介は黙って見ていた。今まで他所でやった工事の場合、機械メーカーと工事会社の者たちはいつも同宿だった。安田にとってはそれが当然のことに思えたのだ。

「そうですか、それじゃあ今日のところはこれで失礼します」

そう言って、ていねいに挨拶をして安田は車を発進させた。

角屋に向かう車中で安田は川村に、何故高瀬が一人だけ別宿になっているのかをしつこく訊いた。川村がそれに答えて説明をした。説明の語尾があいまいになって言葉が締まらない。川村の顔には困惑の色がありありとしていた。

川村は安田に叱られると思ったのだろう。説明がいつの間にか言い訳になっている。

「いつもは、指導員が現地に乗り込んで来る時には、ぼくらの宿泊先が何処かを尋ねてくるんやけど・・・・・・、高瀬さんは訊いてこなかったんや。自分で好きな所を見つけたらしいわ。そやから・・・・・・」

「お前から声を掛けんかったんかい。来る時は知らせてくれ言うて・・・・・・」

「せんかった・・・・・・」

川村は目を伏せて頭を掻いた。

「宿替わらんか言うて、誘いもしなかったんか・・・・・・」

「・・・・・・」

川村は気まずい笑いを浮かべて再び頭を掻いた。安田がちらっとそれを見やった。「もう大分長いからな。高瀬さんも宿を変える気はないやろう・・・・・・。しかし、まずかったな・・・・・・。指導員と工事監督のコンビが現地工事では一番大切なんや。うまくコンビが組めれば工事の大半はうまくいくもんよ。そのためには同じ宿に寝泊まりして、お互いに相手を知らなきゃならん。酒を飲んで話もしなきゃならん。そういう風にして工事現場の人間関係をうまく作り上げていくのが監督の仕事や・・・・」

聴いている川村は神妙な顔になっていった。

「・・・・・・工事現場に居たらなあ、頭にくることもようけいあるがな。たまには酒飲んでお客の悪口も言いたくなるって。そんな時に一人で居たらどないする？。飲む相手も居らん、愚痴をこぼす相手も居らんじゃあ欲求不満になるか気が滅入ってしまうしかないやろうが。高瀬さん、寂しそうやったやないか・・・・・・」

川村は黙ってフロントガラスの前方を見つめていた。車は国道に入り、北へ向かう流れの中にあった。

安田の言葉に圭介は思い当たるものがあつた。毎日高瀬と口をきいている圭介が気が付かずにいたものを安田は素早く見抜いていたのだ。

高瀬の泊まっている宿は人手が無いからという理由で夕食を出さないらしい。それで高瀬は毎晩、帰りに外食をして宿へ戻る。昨日はトンカツ屋へ行った、今日は中華料理屋や、と始めのうちは快活に話していた高瀬も、だんだん夕食の話はしなくなっていた。

その代わりに、パチンコで勝った話をしたり、街で上映されているポルノ映画のことをふと口にしたりするようになった。あまり酒好きではない高瀬のことだ、外食してすぐ宿へ帰り、酒でも飲みながらテレビを見るなどという生活はできないのだろう。

「真藤さん・・・・・・」

突然安田が圭介に話しかけてきた。

「・・・・・・あんた、宿を変える気ないやろか」

「えっ・・・・・・」

「毎日、夕方はおれが宿の近くまで車で送ってやるから……」
「何や、突然……」
「この際、真藤さんが高瀬さんのところへ行くのが一番ええみたいやけど、どうやね」
「……」

圭介には安田の意図が解っていた。しかし、ようやく住み慣れてきた角屋を出て、初めての宿へ移るようなことは圭介としてはやりたくなかった。黙っている圭介の気持ちを安田は察したらしく、

「まあ、そうしたらどうやろうかなって気がしただけや、気にせんどいてな」
と言って、しばらくの沈黙が続いた。

圭介は意を決して口を開いた。
「よっしゃ、おれ明日から宿を変えよう」
「無理にそうせんでもええんやで……」
「いや、無理とちがう。おれも安さんの言うとうることよう解るからな」
「すまん、真藤さん……」

安田は運転の姿勢を崩さなかったが、その後姿には感謝の表情が滲み出ている。フロントガラスから差し込んでくる光にネオンの賑わいが混じり始めると間もなく、圭介たちの車は右に折れて国道を離れた。

安田が来た日の翌日から、工場内は金属の打撃音で騒々しくなった。地下のオイルセラーやピットから引き上げられた配管がコンクリートの床に無雑作に置かれている。ハンマーを手にした見習工たちが数人、配管の間を歩き回りながら、溶接部分を叩いている。一人が電動ブラシを配管内に突っ込んでいる。

ばらした配管のハンマリングの音は甲高く、耳にこたえる。フラッシング時のハンマリングの音は反響が小さく、音も低いのでこんなに耳を刺激することはない。パイプが全部つながって、中に油が流れていることで音が幾分やわらげられるせいだろう。

今回のようなハンマリングは皆初めてだった。皮膚に響いてくるような音の洪水の中で誰もが顔をしかめて作業をした。時たま、ハンマリングの音が止むと皆の顔にほっとした表情が流れた。そんな時でも耳の底の残響がベニヤ板の向こうからの運転音を包み込んでいるようだった。

ハンマリングの現場に高木は時々現れた。両手をズボンのポケットに突っ込んで立っている高木は、身体に響く騒音にも表情を変えなかった。落ち着きのない視線を空中に走らせる姿は相変わらず工事屋たちの嫌悪感を誘った。

「こんなことまでやらなきゃならんのですか」

地下から上がって来た安田に高木は言った。

「・・・・・・・・」

黙って高木の顔を見つめる安田の表情がこわばった。こんなことするのは一体誰のせいだと思っとるんや。さすがの安田も心の中でそう叫んでいた。

秋山は一度だけハンマリングの現場に姿を見せた。

「他所でもこんな手入れをするんですか」

彼は傍にいた圭介に尋ねた。

「こんなことまでさせる所は有りませんね。ちょっと気の回し過ぎじゃないですか」

圭介は気色ばんで答えた。秋山は寂しそうな笑いを浮かべて言った。

「そうやろうね。うちの会社は何もわからんから心配ばかりしてるんですよ。お宅らもたいへんやろうけど、頼みますよ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

対決するつもりで気色ばんだ圭介は、秋山に対応する適切な言葉を失っていた。秋山は工事屋たちに同情している風にも思えた。秋山と対決することを決断のばねとして仕事を進めてきた圭介は戸惑いを隠すことができなかった。

ハンマリングを始めて三日が過ぎた。この特別の作業に工事屋たちが真面目に取り組んでいることに、高木たちは満足のようなだった。現場に姿を見せる高木の表情にも落ち着きを感じられるようになった。

安田の敏速な判断と対応が彼らに安心感を与えているのだった。フラッシングが始まるまではこのまま順調に進むだろう。圭介はそう考えて、一度本社に帰るつもりになっていた。

高瀬のところの係長が来たのはその日の午後の未だ陽の高い頃だった。柔らかい陽射しはあらゆる物に平等に注がれ、木々の梢は小さく揺れていた。用水槽は澄んだ空と雑木林の影を水面に散らしていた。建物の中から聞こえてくる甲高い金属音だけが人々に異様な感じを与えていた。

係長は現場に現れるとすぐ高瀬を捜した。本体の脇に立って、部品の取り付け作業を指図していた高瀬はすぐに係長に気付いた。組立工たちに、今教えた要領で仕事を続けるように告げて、高瀬は係長のところへ歩み寄った。近づいてくる男が高瀬だと気付いて係長はしかめっ面を緩めて、眼鏡の奥に笑いを浮かべた。

高瀬は係長をハウスに案内するとすぐ、安田と圭介を呼びに出た。走っていく高瀬の後姿が暖かい午後の光で小さくなっていった。係長の目は、高瀬の姿が工場内に消えるまでそれを追っていた。

新しい工事工程の説明と高瀬の一時引き上げの話が係長の目的だった。基礎コンクリートの掘り返しなどで工事は大きく遅れている。当初作成した工程表はもう物理的に達成不可能になっている。現場からの報告と見通しに従って係長は現実的な工程表を作成し、それを客先に納得してもらうために来たのだ。

高瀬の滞在は既に連続五十日に及んでいる。この週一杯で恐らく部品の取付け作業は全部終わるだろう。そうなれば、配管工事が完了しフラッシングが始まるまでは、高瀬の仕事は無くなる。その間高瀬を一時帰らせて休息を取らせようというのが係長の意図だ。

一通り説明を聴いた後、係長が高瀬に言った。

「ほな、来週の月曜日一杯居ってもらうか。な、それでええやろう」

「はあ、それでよろしいですわ」

傍で聴いていた圭介はふと思い当たることがあって口を挟んだ。

「できれば土曜日じゅうに帰ったほうがええと思うけど。もう大方終わつとるんやし
.....」

「何でや。少しは様子見のために居ったほうがええのとちがうか」

「ええ、まあそれはそうですが.....」

圭介は口ごもった。どういう風に切り出すのが良いか、圭介には分からない。はっきり言ってしまつて変な目で見られるのもいやだな、と圭介は迷った。安田もけげんそうな顔をして圭介を見ている。高瀬にしてみれば早く帰れるほうがありがたいから、圭介を見る目には期待感が込められる。圭介は意を決するしかないと思った。

「今度の日曜日は知事選挙の投票日なんですよ。できるなら投票できるようにしたほうが周囲もうるさくないし、それに組合も.....」

「.....」

圭介の思った通り係長は妙な顔をした。眼鏡の奥から圭介を見つめる目が冷たかった。

「.....おれはそこまで考えてはおらんかったよ。だけど、そんなことってあるやろうか.....」

「わざと遠くに出張させといて投票できんようにした、なんて言うて攻撃されるようなことがあるんやないかと思っただけですわ.....ただ、ちょっとだけ.....」

「ふむ.....そうかな.....」

話しながら圭介は思った。そう言って攻撃する者がいるとしたら、それは自分自身だろうと。自分を隠しながら、自分の意思を第三者の意思の如く話さねばならぬ。そういう自分の立場が忌まわしいもののように圭介は感じていた。自分の言葉のどこ

ちなさがひどく気になってもいた。

知事選挙は現職の保守系候補と新人の革新統一候補の一騎打ちになっていた。保守系候補は再選を目指して出馬していた。一方、革新候補は当初は二人が名乗りを上げていた。一人は大衆運動畑の出身で前衛を名乗る政党の推薦だった。もう一人は革新勢力の主座を自称する政党が推薦する副知事経験者だった。

基礎票および巷間の人気では、現職、“前衛”、“主座”の順と言われていた。革新の二勢力は候補者を統一しようと話し合いを重ねたが、なかなか合意に至らなかった。統一するなら現在第二位につけている“前衛”候補者で統一したら良いのに、何故そういう単純な算数が成立しないのか、圭介には理解できなかった。

四年前、“革新主座”党出身の革新統一候補が現知事との決戦で善戦したことがあった。選挙運動中、至る所で『青』を『オレンジ』で囲んだ円いシンボルマークが目をはいていた。その統一候補の善戦が革新勢力の支持者に、次回こそは、という期待を抱かせたのであった。圭介もあのシンボルマークを忘れられぬ一人だったのだ。

そういう革新支持者たちの期待を知ってか知らんでか、統一の話し合いは暗礁に乗り上げているようだった。告示も間近になってようやく、元副知事の候補者で統一することが決まった。どうやらタイムリミットぎりぎりを迎えて、“前衛”党側が譲歩したらしい。

圭介は、今度の革新統一の成立を素直に喜べなかった。順位から言っても第三位を予想されていた人が統一候補に選ばれたことは、革新支持の人々の間に疑問を残していた。大勢の支持者の期待を無視して政党のエゴイズムがまかり通ったのだ。四年前と比べたら明らかな後退だ。多くの人々がそう思っていた。

革新統一勢力が頼りにできるのは、国政選挙で著しく伸びてきている“前衛”党の得票率だけだと言われた。また四年間待たねばならぬ。戦う前から圭介はそう思ってしまったのだった。

高瀬が革新候補に投票するだろうという確信が圭介にあったわけではない。自分と一緒に汗をぬぐいながら働く人たちに、自分の気持ちに通じるような感じがただけなのだ。高瀬にしろ川村にしろ投票する場合はきっと革新候補に入れてくれるだろうと思えただけなのだ。

こんなことを口にしたのは浅薄だったかな、と圭介が思い始めた時、安田が突然呟いた。

「そうや・・・・・・・・。こういうことには妙にうるさい変なヤツがいるからな。間に合うように帰ったほうがええやろうな・・・・・・・・。俺たちみたいに、投票日や言うてもいつも何処か遠くで仕事しておって、家に居られん者はどうしようもないがな」

係長が首を捻じ曲げて奥の川村の椅子に座っている安田の方を見た。安田の言葉には経験からにじみ出るような真実味がある。ようやく係長も納得したようだった。

「安さんもそう思うんか……。じゃあそうしよう。ええな、高瀬君」

首を元に戻しながら話す係長に高瀬は無言で頷いた。係長が窓際に座っている高瀬と圭介の方を向くと、安田は口元を三日月形にして圭介に笑いかけた。

普段の安田との対話の中で、安田が保守的な考えを持っていることを圭介は察していた。職場の民主化だの、選挙運動などということに対して、安田はいつも冷たい言葉を発していた。そんな話の最後を締めくくる安田の言葉は「偉い人たちが決めてくれた通りに働いておれば、間違い無いんよ、俺たちは」であった。

たった今の安田の言葉は、いつもの安田の態度から生まれ出たものであったろう。それは圭介の言動に対する皮肉とも受け取ることができた。しかし、安田の一言が圭介を救ったことは明らかだ。あの安田の笑みは「これでええやろう、進藤さん」と言っているようでもあった。

係長が高瀬を伴って事務所へ説明に出て行った後、安田と圭介はぼんやりと外を眺めていた。時折二人の吐き出す煙がハウスの天井に向かって上っていった。

「俺も明日の午後、一旦帰ってくるわ。週明けにまた来るから……」

「ふうーん、それがええかな。俺はフラッシングの段取りが付くまで居ろうと思うとるから、その間に休んでもらったほうがええやろうな。フラッシングが始まったら進藤さんは休めんやろうし……」

安田の答えは淡々としていた。

一服し終えて、二人はハウスを出て行った。陽は雑木林の上の方に移っていた。